

キーワード:

展覧会ディスプレイ  
展示  
鑑賞者  
小林かいち  
常葉美術館

博物館の展覧会活動においては、何を展示するかと同様に、それをどう展示するかということも大切であり、そのためには展示方法についての記録、研究も重要であろう。常葉美術館で開催された「小林かいち」展を例に、展覧会ディスプレイについて考察する。雰囲気づくりや演出ではなく、展示品と鑑賞者が出会い、向かいあうためにディスプレイに何ができるのか。展示施設の制約などの現実的な側面を踏まえながらも、工夫次第でよりよい鑑賞空間を作ることは可能である。その経緯や課題、反省を報告する。

## 1. 経緯と課題

通常、展覧会は閉幕すると撤収される。借用作品・資料は返却されて、展示室は何事もなかったかのようにきれいに片づけられる。何を展示したかということは、図録や出品目録で記録され、公開されることが多い。展示プランやその図面、展示室の様子の写真などは、展覧会担当者によって記録が取られることもあるが、一般に公開されることは稀である。造作や照明などのディスプレイについては、ほとんどが使い捨て、やり捨てで、記録すら残されることが多いだろう。だが何を飾るかということと同様に、どう飾るかということも展示活動において重要であることは言うまでもない。ディスプレイの工夫によって、鑑賞体験は大きく左右される。であるなら、その記録を残していくことは、意義のあることであろう。本論はそのささやかな試みの一つである。

常葉美術館では、平成28年に春季特別企画展として「謎の抒情画家 小林かいち」展を開催した(会期: 5/28~7/3)。小林かいちは、大正終わりから昭和前期にかけて活躍した図案家である。モダンで洗練されたデザインが見直され、近年再評価の機運が高い。それゆえ本展では、展示のデザインについてもひと工夫あるべきと考えられた。来観者の作品鑑賞を導き、より深め、あるいは会場の雰囲気づくりのためにも、単に作品を並べるだけではなく、多少の造作をともなうディスプレイの補助が有効であろうと思われた。

その際、課題となったのが以下である。

- A 常葉美術館の展示室の特性
- B 展示作品の小ささ
- C 作品鑑賞の誘導の度合い

美術館で作品・資料を展示するさいに前提となるのは、作品・資料の保全と、鑑賞のしやすさである。この二つはしばしば相反することもあるが、様々な施設や用具、機材の改良も進められている。当館では、温湿度や照度の調整、防犯、防災などの基礎的な設備機能はあるが、鑑賞のしやすさに関しては不自由な点が多い。展示壁面はすべて壁ケースであるが、昭和52年開館の築40年を経とうとする建築であるため、その古さは否めない。壁ケースの一枚のガラス面が小さく、柱や継ぎ目が多く入ってい

て、鑑賞者の視線をしばしば遮ってしまう。また壁ケースの大きさや天井高も場所によって差が大きい。そのため展示室全体の印象は、こじんまりした空間と開放感のある空間とが入り組むような造りとなっている。来観者の動線も複雑である。

こうした展示室に、小林かいちの作品およそ500点を展示する。かいちの作品はほとんどが絵葉書および絵封筒であるが、その大きさは前者が約14×9cm、後者が約15.5×6cmと小さい。これらを壁ケース内に斜面台を並べて、その上に平置きにするとともに、5~8点をまとめて額装(またはマット装)し、ケース内の壁面に飾る。それゆえ小さいものがひたすら羅列され、単調な印象を来観者に与えることとなる。しかも大きいケース内や比較的開放的な空間ではサイズの小ささはより目立つこととなる。展示空間の大小によって、同じ大きさの作品の印象が変わることも懸念される。

一方、小林かいちの作品世界の雰囲気や、大正から昭和初期の時代感を彷彿させるようなイメージを形にし、造作物として飾ることの是非も勘案された。来観者にとって、そのような空間の演出があったほうが、親しみやすく、作品鑑賞の導きとなる可能性はあるであろう。またデザイン性に富むかいちの作品は、展示デザインへも多様に展開できる魅力を持っている。それを見せることも、デザインについて考える教育的契機となるに違いない。だが演出が過剰になると逆に来観者へ誤った先入観を与え、作品理解の妨げになる恐れもある。博物館においては、まずは鑑賞者が展示物と向き合うことが大切なのであって、ディスプレイはそのためのあくまでも補助であるべきであろう。展示物を注視せず、ディスプレイばかりが目について、それでなにがしかの雰囲気や気分を得たとして、それがはたして正しい展覧会活動と言えるかどうかは、注意せねばならない。

## 2. 実施

こうした課題を解決するためには、館職員だけではなく、デザイナーの力が求められた。そこで本展のポスター、チラシ(図1)などのデザイン作成とともに、展示デザインも含めて業務委託することとした。広報印刷物とあわせ

たのは、同じデザイナーに担当してもらうことによって統一感のあるイメージ形成が可能となるメリットを考えてのことである。業務受託した(株)SBSプロモーションが選んだデザイナーは、坂本陽一である。当館では坂本に平成27年度開催の「テルマエ・ロマエ」展でポスターなどの印刷デザインをお願いしたことがあり、その実績からも信頼してお願いできる人材であった。

坂本に展示室の下見をしてもらいつつ、断続的に次のメンバーで議論を重ねた。坂本陽一(デザイナー)、早津静香(SBSプロモーション)、西澤省吾(㈱ブレン)、大村智基(常葉美術館学芸員)、堀切正人(常葉美術館長、常葉大学准教授)。まず大村学芸員から出品リストと展示プランが提示され、坂本を中心に案が練られた。造作、設置は㈱ブレンが行うこととなり、西澤が具体的な素材や施工方法について提案した。

坂本からは次のような基本的な考えが示された。小林かいちの世界観を来観者に感じてもらうために、「しっとりとした、落ち着いた空間」を作る。そのために展示空間全体の印象として「重心を下げる」。そして来観者の「視線を下げる」。それによって「作品と対峙する集中力を高める」。

坂本が最終的に具体化したディスプレイは、下記①～④である。それをブレンが図面に起こしたのが図2である。図2の左上・図外が来観者の出入り口にあたり、ここの自動扉(写真1)から入館して受付を通り、壁沿いに左から右へと時計回りを見ていく動線となる。わかりやすいように図2の壁ケースに、観覧順に1～14の番号を振る。ケース3、4が最も狭く、天井高も低い。1、2、5～9はやや大きい、天井高は低い。10～14が広く、高い。

- ① ケース3、4、10～14のガラス面上部に黒のビニールクロスを貼る。(図面の青線。写真2、3、4)
- ② ケース1、2、5～9の前に、天井から縦750mmの暗幕を吊る。施工は既設のライティングレール(配線ダクト)を利用する。(図面の緑線。写真5、6)
- ③ 展示室内各所に、小林かいち作品の図柄をデザインしたバナー6枚を天井から吊る。(図面の赤線。写真7、8)
- ④ 来観者の記念写真用に、小林かいち作品の図柄をデザインした写真撮影用バックパネル(顔出しパネル)を作成し、設置する。(図面左側・受付下。写真9)

このうち④については、展示空間の外に設置したもので、本論の考察からは省くが、昨今流行りの造作物のひとつである。そのねらいは、上記課題Cへの一助であるとともに、来観者の記念のため、また原則写真撮影禁止であることの代替サービス、写真を撮ってもらうことによる広報効果への期待(SNSによる拡散)などである。

①は、ガラス面の上部を覆い隠すことによってケースの見た目の大きさを減じ、相対的に展示物の小さい印象を

緩和する方法である。これは、かつてから多くの美術館や博物館でよく見られる工夫である。今展で特徴的なのは②であろう。①の高さと合わせることにより、低いケースと大きいケースとの目線の統一感を持たせる(写真7、10)。それとともに来観者の動線を導く役割も果たす。来観者はこの幕とケースとの間に導かれ、心理的にケースから離れることを妨げられ、自然と展示作品に近づくようにながされる(写真11)。その結果、空間の大きさと作品の小ささを意識することなく、作品に集中できる環境をゆるやかに成り立たせる役割を果たしているのである。

③は、上記の課題Cへの対応策であり、作品世界の雰囲気づくりや会場の賑やかしであるが、同時に来観者の動線を②とともに、ゆるやかにコントロールする役割も期待されている(とくにケース1、3への誘導)。そのために設置にあたっては現場調整がなされ、最終的な位置決めがなされた。さらにこれらのうち5枚のパネルは、ケース10～14までの大きな通路の空間を適度に遮蔽する役割も担っている。大空間を区切ることによって、ケース1～2や3～4の通路部分の小ささへ空間を整えて、展示作品の小ささの印象を軽減する。ほどよいバリアー、遮蔽幕となりつつ、しかし過度の閉塞感を与えないために、適度な大きさ、高さ、透過性が慎重に検討され、選ばれた。①②③ともに、美術館、デザイナー、施工業者間で緊密に連絡を取り合い、簡単な試作品の制作やその仮設置、パソコン上での予想イメージ作成などの試行を経て、完成を見た。

### 3. 結果と反省

課題A、B、Cのうち、結果としてCについては大きなことは行わなかった。当初は、ケース10～14までの通路部分の天井に空く6か所の天窗(通常は遮光されている)を利用した造作が面白いのではないかと考えたが、議論を進める中でそれは副次的なものに見なされ、最終的には捨象された。現実的には予算と時間の制約もあったからだが、考え方の方向性として、あくまでも展示品へ来観者をいかに向き合わせるかということに絞り込まれていったためである。

来観者の鑑賞の様子を観察していると、その目的はおおむね達成されたように思う。斬新だが演出過剰なディスプレイではなく、鑑賞者と展示物との出会いの場をいかに整えるか。今回の取り組みは、ささやかではあるが、博物館の展示における基本に立ち返った一事例だったと言えるかもしれない。

②のアイデアは坂本の発案で秀逸であった。もちろんその素材、形態、図柄などについては、他にも様々な選択肢があったろう。今回はシンプルな形に落ち着いたが、たとえば丈をもっと長くすれば動線誘導をより強制的に行うことができるだろうし、賑やかしのためや教育的利用(解説や参考図版の掲示など)も考えられるかもしれな

い。さらには照明デザインとの兼ね合いや、あるいは来観者の休憩用椅子の配置に至るまで、まだまだ多様な工夫が可能である。③についても、より緊密な展示プランとの関連付けや、解説パネルの代用とするなどの展開もあるだろう。いずれにせよ当館のような古い展示施設であっても、工夫次第で新たな展示の可能性が開けることを再認識できた。また、そのためにはデザイナーの力を借りるとともに、美術館やデザイナーの考えを理解し、それを現実的な制約の中で具現化できる有能な施工業者の力も不可欠であることが、あらためて確認された。

(文中、敬称略)

図1 展覧会チラシ



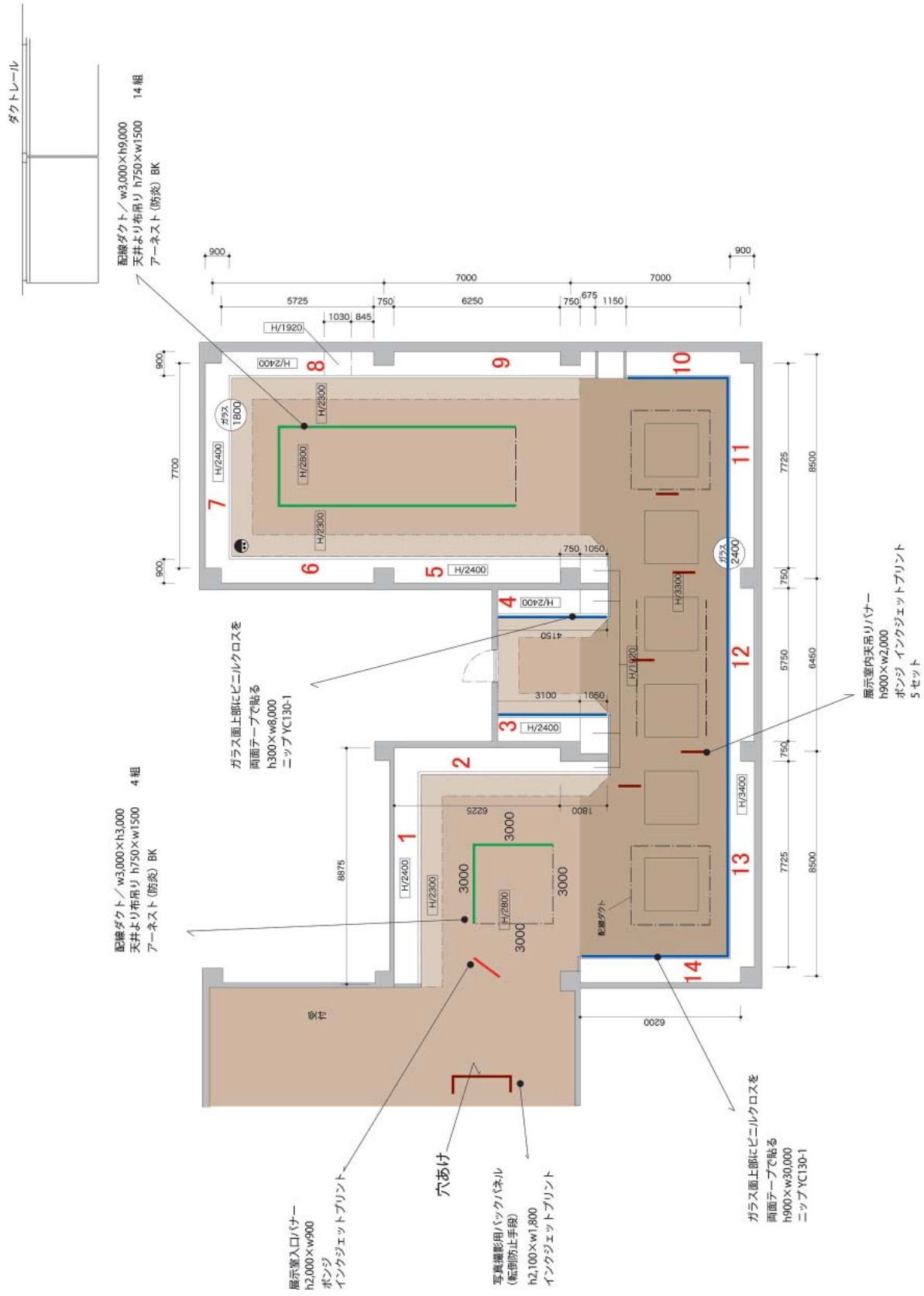


図2 ディスプレイ配置図 作成: 株式会社



写真1 入口



写真2 ケース11、12

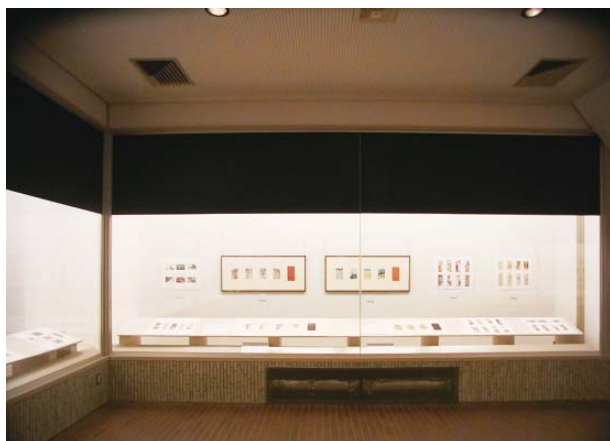


写真3 ケース14



写真4 ケース3上部



写真5 ケース1、2



写真6 ケース5～9



写真7 展示室入口付近。左手奥がケース2、  
右手奥がケース12、13



写真8 ケース14の前からケース10の方向を望む。  
右手にケース11～13



写真9 写真撮影用バックパネル(顔出しパネル)



写真10 ケース1からケース13の方向を望む。



写真11 ケース10手前からケース7の方向を望む。  
右手にケース8、9